



最優秀賞 岐阜県推進委員会委員長(岐阜県知事)賞

ソファーからのメッセージ

高富中学校 1年 尾関 将成

春、中学に入学して新聞部に入部したことから、新聞を読むことが増えた。明日から夏休みだと、わくわくしているときだった。家で新聞を読んでいると、「歌やヨガで更生に寄与」と見出しがあった。刑務所で高齢の受刑者を対象に音楽やヨガを通じて、更生に寄与したとして、二人の方が表彰されたという内容だった。最後は「社会を明るくする運動の一環」と締め括られていた。その時の僕は、「へえ」と思う程度で、どこか他人事だった。実は、母の育った家は、この刑務所の目と鼻の先にある。そんなことから、軽い気持ちで母に話すと、「勉強や仕事をするとは聞いたことあったけど、歌やヨガも更生につながるんやね。」そう言えば、お婆ちゃん家にある紺色のソファーは、そこで買ったものやよ」と言うのだ。ソファーを刑務所で買ったのだと、僕は、母がおかしな事を言っていると思いつつ、続きを聞いた。紺色のソファーは、十年以上前、まだ僕が生まれる前に、祖父が矯正展へでかけた時、細かな部分まで、とてもきれいに作られており、一目で気に入って、その場で購入したそうだ。矯正展とは、刑務所等の刑務作業で作られた品物を展示したり、販売したりする広報活動であり、僕も何度か連れて行ってもらい、とても楽しかったことを覚えている。もちろんソファーは、刑務所作業製品だ。今では、キャピック製品と呼ばれているそうだ。

紺色のソファーは、それ以来、祖父母の

疲れを癒やし、母達のわがままを受け止めて、僕たちの遊びにも付き合ってくれている。多分僕たちという時が、一番体力を使っていたらう。それでも、へこたれない、強いソファーだ。きっと、このソファーを作った人は、思いやりのある芯の強い人だ。そして、心から悔い改め、未来への希望もち、誰かが座っている姿を思い浮かべながら作ったのではないだろうか。そうでなければ、みんなを癒し、笑顔にするだけでなく、強さまで兼ね備えたソファーをつくれぬ。このソファーは、僕たち家族には、なくてはならないものだ。

僕は、この気持ちを伝えたいと思った。僕はソファーから、製作者のメッセージを受け取った。このような感謝の気持ちを、製作者に伝えられたら、きっと嬉しいに違いない。喜びが更生につながり、少しの力かもしれないが、明日への励み、明るくなるのではないだろうか。作るだけ、使うだけの一方通行だけでは想いや感謝は、伝わらない、それどころか、孤独感に満たされてしまう。想いを、伝えるからこそ、更生や明るい社会につながるのではないだろうか。

しかし、悔い改めたとはいえず、もしその人が、自分の大切な人を、傷つけた人だったとしても同じことが言えるのか。正直な気持ちは、「僕は自信がない」だ。でも、ソファーの製作者に抱いた気持ちも正直な気持ちだ。どちらが正しいかは、誰にも決め

られないだろう。僕は、これからの二つの気持ちで、葛藤するだろう。きっとみんな同じだ。ただ、僕は、この作文を通して、しっかりと悔い改め相手を思いやりながら前を向き、取り組んでいる人がいること、その人の作品に魅了され作品を通して、感謝の気持ちを持っている人がいることを知った。このことが、以前の僕から一歩進み、成長できたと信じている。

みんなの願いは、加害者も被害者も生まれないこと。人が、笑顔でいられることだ。そのために、まず、自分を大切にしよう。そして、互いに認め合い、互いに思いやろう。その先には、必ず明るい未来(社会)が待っている。

第73回“社会を明るくする運動”

第73回“社会を明るくする運動”作文コンテストで優秀な成績を取めた2人の生徒の作品を紹介します。



優秀賞 岐阜新聞社賞

今の僕にできること

高富中学校 1年 村瀬 克宏

「周りが受け入れてくれなかったから」「就職できなかったから」

山県警察署の高木さんから聞いた、罪を逃れるための言い訳の言葉を、僕は今でも思い出す。罪を犯した理由を、自分を取り巻く環境が悪い、と言うのだ。そのことに僕はショックを受けた。自分の罪を周りの環境でごまかそうとする人がいるなんて、なんだか胸が苦しくなった。自分が歩いている時に、石につまずいたことを、人が悪いのだと言っているように思えた。確かに、環境が違えば罪を犯した人の人生が変わっていたかもしれない。

「だからやめた。」
だから、理由が理由として正しいのか、疑問しか生まれなかった。それは絶対に違うだろう。僕はそう思っていた。

毎日、耳をふさぎたくなくなるようなニュースが僕の耳に入ってくる。なぜ、犯罪は減らないのだろうか。僕の住む山県市でも、犯罪は日々起きている。山県警察署に、話を聞きに行きたいと電話をした際、いつ事件が起きるか分からないから、話ができない事もある、と言われていた。僕の知らないところで、犯罪や事件が起きているのだ。ビックリだった。それと同時に、僕の住む山県市が平和で犯罪や事件のない街になってほしいと思っただ。なぜ、犯罪が治まらないのか、高木さんに尋ねてみた。「周りの冷たい態度や、偏見から、自分の心に限界がきた時に犯罪や事件が起きるのではないか」と返ってきた。この言葉を聞いて僕の中では二つ考えたことがあった。

一つ目は、罪を犯した加害者の気持ちだ。今まで、傷つけられた被害者側の気持ちしか見てなかった。だから、罪を犯し

た人の気持ちについて想像してみた。人は独りでは生きられない。家族や友達、学校、地域というそれぞれの社会の中で生きていく。その一つ一つの社会の中で、自分の居場所を誰かが探している。しかし、その小さな社会の中で冷たい態度を取られたら、どうだろう。自分の居場所や安心できる人がいなかったら、苦しむだろう。もし、自分ではどうにもならないことを理由に居場所を失ったとしたら、他者のせいで、自分が罪を犯してしまったのだと、責任転嫁したくなることも想像できた。

二つ目は、命の大切さだ。僕にも、家族にも、友達にも、みんな命がある。それは罪を犯した犯罪者も同じように、一つの大切な命がある。だからこそ、人の命を人が奪うことはおかしいと思う。周りの冷たい態度や偏見が、犯罪者をつくりだしているのだとしたら、僕も誰かの命を奪う可能性があるのだと思ったのだ。そう考えると、とても怖くなった。僕の友達に、毎日学校に通えない子がいる。なにか悩んでいるのかな。理由は僕には分からない。けれど、僕に出来ることはしたいと、学校生活を過ごしてきた。その子が学校に来たら、いつも「おはよう。元気？今日も楽しもう！」と声をかけている。この言葉が、友達に勇気を与えていると思いつけてきた。さりげないことかもしれないが、僕に今できることを続けてきた。しかし本当に、その子は僕の言葉で元気になれたのだろうか。高木さんの話を聞いて、少し不安を覚えた。

この二つのことから、僕だつて被害者にも加害者にもなる可能性があると感じた。これまで僕は加害者になることは、

想像できなかった。自分のいる社会の中で、急に居場所が奪われたらきつと苦しみ、悩むだろう。その時に僕を見守ってくれる人はいるのだろうか、温かい声を誰か、かけてくれるのだろうか。自分を受け止めてくれる人がいない環境が続いた時、僕はどう行動するか分からない。その時が僕の限界だ。だとしたら、罪を犯すかもしれない。加害者側の気持ちに寄りそって初めて気づいたことだった。言葉はとても便利だ。自分の想いを伝えることや、相手を喜ばせることができる最高の道具であり、人を悲しませる最強の武器でもある。そんな「言葉」は人の居場所をつくるために、必要不可欠だと僕は考える。

人は独りでは生きられないように、犯罪は独りでは生まれえない。社会ができるように、人が集まると様々な考えが生まれる。その集まりの中に、その人それぞれの居場所があれば、きつと罪を犯す人は減るのではないだろうか。僕の友達に、学校という居場所ができるように、今の僕に何ができるのか、改めて考えた。やはり、声をかけることだった。そして、何かあった時には話をしてほしいと伝えよう。僕は「言葉」という最高の道具を使って、友達を受け止めたい。

もし、一人一人が言葉で、勇気を分け合えることができたなら、安心できる居場所が生まれるはずだ。そして、僕の大好きな山県市に綺麗で美しい花のような笑顔があふれるだろう。安心できる地域社会になるよう、僕は言葉を、人を幸せにする道具として使っていきたい。